

教会とはキリスト者の集まり、共同体です。それをキリストのからだとも言います。からだとして機能するためにはただ集まっているだけでは何も起きません。どんなにきれいに整列していても機能しません。互いに繋がり、絆がありしかも一致している必要があります。そうやって一致と絆を深めてゆくことは交わり、コイノニアと呼ばれます。交わりとは一緒にお茶を飲んだり、おしゃべりすることだけではありません。というより、それは交わりということのごく一部の意味です。交わりの意味は分かちあう、分け合うということにその本質があります。喜びを分かちあう、重荷を、分かち合う、嬉しいこと、悲しいことを互いに分け合う、それこそがコイノニアの本質です。そしてそれは互いの働きかけがなければ動き出しません。一方が話しかけてももう一方の人が聞いていなければただの独り言に終わります。一方が決めた約束を守ると言ってももう一方が約束を守らなければ一致と絆は保てません。

ただ生まれつき自然にそのような交わりによる一致と絆が結べたら良いのですがそれが持たないでここまで私たちは歩んできています。最初の人、アダムとエバが罪を犯して神との関係、人との関係がおかしくなったわけですがその前の理想的な神と人との関係も書かれています。キリストの十字架によって救われた私たちはいろんな失敗や罪を犯しながらもキリストが与えて下さる恵みとまことによって少しずつ神との関係、人との関係が修正されてゆくのです。

少し前置きが長くなりましたがパウロは今日の箇所でも個人的な名前をあげながら目指すべき一致について教えています。先日も話しましたがこのピリピ人への手紙には様々な特徴があります。喜びということが多いこと。パウロが獄中であって書いた手紙であるということはすでに話しましたが他の手紙にくらべてプライベートな部分が多いということもそうです。今日の箇所ではユウオデヤとストケというふたりの婦人の名前を挙げています。テモテ、エパフロデトといった人たちは、その信仰や奉仕が誉められています。ユウオデヤ、ストケの場合は誉められることで名前を記されたわけではありません。どうもふたりの間に、何かのいさかいがあり、うまく行かなかったことがあったようです。それで、パウロはふたりに「ユウオデヤに勧め、ストケに勧めます。あなたがたは、主にあって一致してください」

(4:2) と書き送ったのです。ユウオデヤ、ストケは実名まであげられて手紙に書かれたわけですから、嫌な気持ちになったかもしれません。けれども、クリスチャンの一致は、実名をあげてまでも解決しなければならないほどに大切なことだったのです。もちろん、いつも、どんな場合でも実名をあげなければならないということではありませんし、そのような必要のないようにしたいものです。今朝、私たちは、ユウオデヤ、ストケが痛い思いをしてまでも学ばなければならなかったクリスチャンの一致ということを、真剣に学んでおきたいと思えます。

ユウオデヤ、ストケの間にどんな問題があったのか、聖書は何も書いていませんので、私たちには詳しいことはわかりません。ある人は、ユウオデヤ、ストケのふたりは共に女性であったので、二人の間に女性特有の感情のもつれがあったのだと推測しています。ピリピの教会は、紫布のビジネスをしていたルデヤという女性を中心になって始まった教会でしたから、おそらく多くの婦人たちがいたのでしょう。そして、ご婦人方の集まる場所には、感情的なトラブルが発生しやすいというのも一理ありますね。しかし、女性同士だからすぐに感情の問題だったと推測するのは、早合点かもしれません。ユウオデヤ、ストケのふたりには、女性としての弱さはあったでしょう。しかしふたりはその弱さを克服して、パウロと一緒に伝道し、教会のリーダーとなって働いたのです。

ですから、二人の間にあったことを、なにもかも感情の問題として片付けてしまうのには無理があるような気がします。そうであれば、パウロは二人に一致を勧めるよりは、悔い改めを教えただろうと思えます。もし、この二人が、それぞれ自分の方に人々をひきつけようとして張り合ったり、競いあったりして

いたのなら、パウロはそうした自己中心的な思い、党派心をまず諫めたことでしょう。罪を悔い改めないでいる二人に一致を勧めるのは、安易な妥協を勧めるのと同じで、かえって問題を覆い隠してしまうことになるからです。今日でも、ただ波風を立てないことだけを考えて安易な妥協をしてしまうとか、本当の問題の解決でなく、問題を覆い隠すだけのことを、一致と考えてしまうことがあります。そうしたことは本当の一致ではありませんね。

ユウオデヤ、スントケの二人の間の問題は、個人的な問題というよりは、おそらくは伝道の方法や、組織のことなど、教会の運営に関しての意見の違いだったのではないかと思われます。しかし、それがどんな問題であれ、聖書は、「キリストにあって」解決できると言っています。パウロは言いました。「ユウオデヤに勧め、スントケに勧めます。あなたがたは、<主にあって>一致してください。」そうなのです。クリスチャンの一致は「主にあって」「キリストによって」可能になるのです。

もちろん、光と闇、真理と偽り、善と悪には一致はありません。聖書は、そういうものと一緒になることを、決して勧めてはいません。しかし、お互いがキリストにあって闇から光に入れられているなら、偽りを捨て真理に立っているなら、悪を離れ善を追い求めているなら、たとえ、意見は違っても、お互いがキリストにあるものだということを認めあって、一致を求めていくべきなのです。1節で、パウロはピリピのクリスチャンに「私の愛し慕う兄弟たち、私の喜び、冠よ。私の愛する人たち」と呼びかけていますね。パウロは、ユウオデヤ、スントケを名指して「一致しなさい」と勧めています。その時、パウロは決して彼女たちを辱めようとしてでなく、彼女たちを「愛する人々」「同労者」として扱い、彼女たちへの愛情と、信頼に基づいてその名を呼んだのです。3節の後半に「この人たちは、いのちの書に名のしるされているクレメンスや、そのほかの私の同労者たちとともに、福音を広めることで私に協力して戦ったのです」とあります。クレメンスという人のことも良く知られていませんが、「いのちの書に名のしるされている」と表現されているように、先に天に召されていった人なのでしょう。パウロはユウオデヤ、スントケの名も「いのちの書」にしるされている、彼女たちは、解決しなければならない問題を持っていたとしても、救われた本物のクリスチャンであると言っているのです。私たちクリスチャンがお互いをキリストを通して、共に神から生まれた「兄弟姉妹」であること、共に天の「いのちの書」に名をしるさた者であること、お互いがキリストにあって共通したものに立っているということを認め合うことができれば、自ずと一致に向かっていくことができるのです。

クリスチャンの一致は、キリストから始まります。そして、それはキリストに向かっていきます。クリスチャンの一致は、お互いがキリストによって救われ、赦され、愛されているという共通の基盤からスタートします。そして、キリストのために、キリストの福音のために働くということに向かっていきます。一致にはスタートラインとともに、ゴール、目的、目標が必要なのです。そして、お互いが一つのゴールを目指していく時、そこに一致が育っていくのです。クリスチャンが互いに他のクリスチャンだけを見て、人と比べあっても何も生まれてきません。互いがキリストのために一つの目的、目標、ゴールに目を向けていく時、一致が可能になるのです。実は、ユウオデヤもスントケも、かつてはそのような一致を持っていたのです。3節の後半に「この人たちは、いのちの書に名のしるされているクレメンスや、そのほかの私の同労者たちとともに、福音を広めることで私に協力して戦ったのです」と書かれていました。ふたりは、パウロ、テモテ、クレメンスたち、また他の多くの人々と共に伝道のため、教会のため、心を合わせ、同じ目的のために、十年以上も共に働いてきたのです。しかし、パウロがピリピを去り、クレメンスが天に召されなどしていくうちにユウオデヤ、スントケの間の意見の違いが大きくなっていったのでしょう。それで、パウロは、ユウオデヤ、スントケに、伝道の方法や教会の運営については意見は違っても、福音をピリピの町に、マケドニア地方に満たすという大きな目的のために一致してほしい、自

分たちに与えられた目的に目を向けるなら、一致できるのではないだろうか、語りかけているのです。私たちも、キリストの教会を建て上げていくという、私たちに与えられた使命、目標を共に見上げて、心一つにして励んでいきたいと思えます。

クリスチャンはキリストにあって一致し、キリストのために一致します。ユウオデヤもスントケもそのことは良く分かっていたでしょう。しかし、彼女たちがキリストにあっての一致、キリストのための一致に立ち返るためには、キリストの恵みと共に、彼女たちを取り囲む兄弟姉妹のサポートが必要でした。

3 節の始めに「ほんとうに、真の協力者よ。あなたにも頼みます。彼女たちを助けてやってください」とあります。ユウオデヤとスントケの間に入って、二人が理解しあい、受け入れあうのを助ける人物が必要でした。ここで「真の協力者」と言われている人が、誰のことかは、分かっていません。ピリピ教会の創設にかかわったルデヤかもしれませんし、「協力者」と訳されているギリシャ語は「スズゴス」で、その「協力者」というのは実は「スズゴス」という名前の人かもしれません。何となく鈴ちゃんと言いたくなります。この「協力者」が誰であるかは、ここでは大きな問題ではありません。クリスチャンの一致のためには、自分の名を隠して働く人が必要なのだということが大切なのです。もしかしたら、ユウオデヤ、スントケの二人の間にはさして問題がなくても、二人の意見の違いを煽り立てている取り巻きがいたのかもしれません。そういうことは世の中で良くあることですが、私たちは「Aさんはこう言っていた」「Bさんはこうだった」と人のことを騒ぎたてないで、静かに祈る知恵が必要です。私たちお互いは、一致を壊す側に回るのではなく、争いのあるところに一致を願い、そのために努力する者たちでありたいものです。

さて「協力者」スズゴスということばは、直訳すれば「くびきを共にする者」という意味です。普通、これは、夫婦や肉親を呼ぶ時に使いますが、パウロはこのことばをピリピ教会のあるクリスチャンに対し使っています。この人は、パウロと同じ重荷をもって教会を愛していた人に違いありません。使徒として、伝道者として、牧師として、パウロは大きな重荷を負っていました。遠くローマにいてもパウロはピリピの教会を忘れることがありませんでした。自分自身が獄中にいても、パウロは、自分のことよりも、人々のことを心配し、人々のために祈りました。そんなパウロにとって、ユウオデヤ、スントケのことは、彼の重荷に、またもうひとつの新しい重荷を加えることだったでしょう。しかし、幸いなことに、パウロには、この重荷と一緒に背負ってくれる人がいたのです。そういう人がいたからこそ、パウロの働きが進んでいったのです。

主は、いつの時代も、ご自分の教会のためにこのような「協力者」を求めていらっしゃいます。あなたにも「鈴ちゃん」、いいえ、スズゴスになってほしいのです。地上の教会は、どこもまだ建設途上にあります。完成を目指して工事中なのです。工事現場が散らかっているように、私たちの教会にも、さまざまな点で欠けたところがあるでしょう。しかし、教会の欠けたところだけを見て、指摘するのではなく、これから完成を目指して建てあげられていく姿を見つめて、共に重荷を負っていただきたいのです。

キリストによる一致、キリストのための一致、そして、一致を助ける協力者たちで満たされた私たちの教会でありたく願います。